槍ヶ岳開山

新田次郎

文春文庫

文春文庫

定価はカバーに表示してあります

槍ヶ岳開山　112－10

1977年7月25日　第1刷

著　者　新田次郎

発行者　樫原雅春

発行所　株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3　〒102

TEL　03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが、小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します

印刷・凸版印刷　製本・加藤製本　Printed in Japan

文春文庫

槍ヶ岳開山

新田次郎

文藝春秋

槍ヶ岳開山

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

■目次

序章 7
出郷 24
笠ヶ岳再興 91
槍ヶ岳への道 175
鉄の鎖 229
飢饉と法難 292
終章 322
取材ノートより 352
解説 武蔵野次郎 357

序章

播隆上人の鋭い眼は槍ヶ岳の穂を睨んでいた。その眼力によって、岩峰にまつわりついている霧を追い払おうとしているようであった。播隆は僧兵のように肩をいからし、草鞋で岩を踏みしめ、錫杖を岩頭に立てていた。猟師風の着衣が霧に濡れていた。

播隆は霧をとおして霧の奥のものを見ようとした。見ようと念ずれば必ず見えるような気がした。が、霧は容易に霽れそうもないばかりか、播隆と中田又重郎の二人をその中に包みこもうとした。

播隆は錫杖を岩に立てかけ、槍ヶ岳の穂に向って合掌した。故郷の越中の八尾を追われるように出て来てから十五年間の苦難の道が霧を通して見えるような気がした。岩頭にたたずんで祈り、岩窟にこもって瞑想し、子供たちに乞食坊主と罵られ、石を投げつけられながら諸国を行脚した修行僧のころが思い出された。そして五年前、飛騨の笠ヶ岳を再興して、その頂で望見した未

踏の岩峰槍ヶ岳はいま眼の前にあった。
その頂に立てば、この十五年間求めつづけていたものが与えられるという保証はなかったが、そこには、彼の閉ざされた心を開くなにかがあるに違いない。
「このごろはいつもこんなに霧が深いのか」
播隆は彼と並んで立って岩峰を見つめている案内人の中田又重郎に訊いた。
「いつもっちゅうことはねえが、夏は霧にかくれて見えねえときの方が多いずら」
「待って見よう」
「風が出ると霧は霽れる、だが……」
「風はきっと出る」
播隆は足元から槍の穂の根元までの距離をはかった。せいぜい歩いて百歩ほどのところだったがそこまでは岩石が重なり合っていた。播隆は足元に眼を戻して、周囲を見た。霧でなにも見えなかった。ずっと下の、二人が泊っている洞窟も霧の中だった。風が播隆の頬を打った。播隆は眼をふたたび、槍の穂へ向けた。
「霧が霽れるようだな」
又重郎がひとりごとのように云った。それまで動かなかった霧が動き出した。霧の間から、黒い岩壁が見えはじめて来ると、槍の穂の輪廓がどうやら分るまでになっていったが、そこで霧はそのままの濃淡さで岩峰にまつわりついた。播隆は溜息をついた。又重郎は舌打ちをした。
「風が出たようだが」

なぜ霧が霽れないのかという播隆のひとりごとに、

「霧が霽れるにはもっともっと強い風が……だが風が強くなると、こんどは寒くて、岩に取りつくわけにはいかねえ」

播隆は足元に眼をおとした。岩と岩の間にひとつかみほどの植物の群があった。五輪の花が、そのあたりの霧を黄色に染めていた。花を見ると夏を思わせたが、肌に感ずる冷気は秋の末のものだった。

播隆は眼をふたたび槍ヶ岳の穂にやった。霧の幕をとおして岩峰が影絵のように見えた。その岩峰は高さ数十間ばかりに見え、次の瞬間、数百間にも見えることがあった。霧は人の眼をたぶらかし、その遠近感覚を奪い去ったうえで岩峰との奔放なたわむれに耽溺しようとしていた。

「槍の穂に霧がかかるとなかなか霽れるものではありませぬ」

鷹のような鋭い眼付をして、熊のようにたくましい身体をした中田又重郎がいった。そのことばの裏には、岩峰登攀はあきらめて引返そうという意味が含まれていた。

「風が出ると霽れるといったではないか、風は前よりたしかに強くなった」

播隆は中田又重郎の顔をふりかえって見た。眉毛に霧つぶをつけている中田又重郎のうしろの方がいくらか明るくなって来たように見えた。そしてすぐ、雲海の上に穂高連峰の頂が見えた。

「やはり霧は霽れるぞ」

播隆は穂高連峰より更に遠くに八ヶ岳の頂を望見した。雪をいただいている山はなく、どの山の頂も明るく輝いて見えた。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

風とともに霧はふたたび播隆の視界をさえぎった。

「ここまで来たのだ、どっちみち、これ以上天気が悪くなるということはあるまい」

播隆は中田又重郎にそういうと、錫杖を取って、槍ヶ岳の穂に向って歩き出した。槍ヶ岳の根元で霧が渦を巻いていた。

渦はゆっくり廻りながら、岩峰の肌をこすり上げるようにしながら、頂へ近づいていった。播隆はその霧の渦の行方を追った。渦の眼の中の岩肌のなめらかさを追うように、次第次第に上方へ眼をやっていった。槍の穂の頂上は僅かな平らを持っているように見えた。文政十一年（一八二八年）七月二十八日、太陽は傾きつつあった。

「上人様、やはりやめたほうがいいではねえずらか、この槍の穂へは未だに誰も登った者はねえ、生きものは、たとえ鳥でさえも、この尖った岩の頭に止まったのを見た者はござらぬ、これから上は天のものだ。われわれが登るべきではねえ」

中田又重郎が云った。

「天のもの」

播隆は又重郎のことば尻をつかまえたが敢て追求することはなく、

「もう一度身をととのえよう。ひとつの油断があってもならぬ」

播隆はそういって、自らの草鞋の紐を結び直し、山ばかま、脚絆、股引をも改めた。最後に播隆が、頭巾をかぶり直したとき、又重郎は、あきらめた顔でいった。

「では上人様、登れるところまで登るずらか」

又重郎は仏像の入った背負袋とその上にくくりつけた綱の束の重みをたしかめるようにゆすぶってから岩峰の基部へ向って踏み出した。二人が踏みころがす岩の音がしばらく霧の中で聞えていた。

二人が岩峰の基部に近づくと、それまで岩峰に執拗にまつわりついていた霧が、もはや岩壁とのたわむれに飽き飽きしたように離れていった。といっても、全体的には槍の穂は未だに霧の支配下にあった。霧が幾分うすくなったというていどであったが、基部から首が痛くなるほどふり仰ぐと槍の頂上まではどうやら見とおすことができた。

「又重郎さん、あの岩溝に沿って登っていこう、登りつめたところに大きな岩のこぶがある、あそこから右によけるのだ……」

又重郎にもそこまでは分っていた。さて、それから上を上人はどのように登ろうというのか、岩壁を見つめたままでつぎの言葉を待っていた。

「そこから上はここでは分らない。非常に困難だということだけははっきりしている」

播隆はそういうと又重郎と顔を見合わせて、二人の観察が同様であることを認め合うようにうなずいた。

更に霧は薄くなった。霧が霽れていくと同時に一番厄介な風がやんでいってくれたらと願うのだが風は相変らず吹いていた。

播隆は肩幅が広く、巌のような身体つきをしていた。多年の間、念仏修行僧としてきたえ上げた身体だった。足を八の字に踏み開いて錫杖を岩に立てて、槍の穂を見上げている姿勢は一種の

威力さえ持っていた。播隆は錫杖を岩の根元に横たえて、その手をそのまま岩肌に持っていって触れた。岩肌はつめたく濡れていた。そうしていると、岩のつめたさが、そのまま身体の中へ入りこんでいってやがて全身が凍えてしまいそうだった。

「そこまで登って見ずか」

又重郎はもともと頂上まで登れるとは思っていなかった。できることなら、こんな危険な登攀はやめにしたかったが、なんの理由もなく、止めにしたとなったら、播隆上人としても引っこみがつかなくなるだろうから、適当なところまで登ったところで不可能だと云えるきっかけを摑もうと思っていた。

又重郎は播隆が指示した岩溝を目ざして登っていった。下から見ると岩溝のように見えたが近づいて見ると、溝のように、身体をはめこむのに具合がよくなってはいなかった。そこだけが、いくぶん、岩峰の面より落ち窪んでいるというだけのことであった。

「上人様、私がいいと云うまで動かないでいてくだっせい。落石があるかも知れねえで、いつでもよけられるように、足場をよく見て置いておくんなせい」

中田又重郎は父に鷹取りを教わっていた。鷹の巣の多くは高い木の上にあったが、岩壁の洞穴の中に巣をかけることも稀ではなかった。彼はそういう岩に鷹の子を取りに父とともに何度か登ったことがあった。

又重郎は一歩一歩を慎重に踏んだ。そして或る程度登ると、そこに踏み止まって播隆の登って来るのを待った。播隆は岩にへばりつくような登り方をしていた。岩を登るのには、それがもっ

とも危険な姿勢だった。

「上人様、それじゃあいけねえ、こういう具合に、岩を突き放すようにしねえとかえって滑る」

又重郎は両手で岩を突き放すようにして胸を張って見せた。

「こうするのだな」

播隆は又重郎のいうとおりにしてみたが、やはり、岩と身体の間隔が開くと不安になって、すぐまた岩にすがりつく恰好になった。又重郎は綱を播隆の腰に結びつけて、その端を自分の身体に巻きつけた。岩壁の鷹の子を獲りにいくとき、父と子はこのように綱で、つながれたことがあった。播隆の身体はやや安定し、ゆっくりだったが、登攀高度をかせいでいった。

二人は岩溝の上限まではどうやら登った。しかしそれから上は傾斜が急で、一寸身体を引き上げるのも容易ではなかった。それに、ところどころにおおいかぶさるような岩があって、それを乗り越えることはできないから登攀方向を変えねばならなかった。

一時霽れた霧がまたおし寄せて来た。それまでは岩峰にたわむれかかるような霧であったが、今度は横なぐりの強風が運んで来た始末に負えない霧だった。霧の微粒子は播隆の耳目を襲い、着衣を濡らし、そして、急速に彼の体温を奪い去っていった。

「これはひでえ、とても登れたものじゃねえ」

又重郎は登攀を中止しようとした。凍えた手をふところに入れて暖めた。風と雨だけでなく二人の前にはそれまでにない難所が待っていた。どっちへどう方向をかえても、そこから更に上への登攀の路筋が発見されなかった。

結局、厄介な一枚岩をなんとかしてよじ登らないかぎり頂上へ達しられないことがはっきりしたところで又重郎はこの登攀をあきらめた。登れない、ときめてしまうと意外に気持は軽くなった。又重郎は、その時はもうおりることの方を考えていた。

「だめだ。この一枚岩が越せねえかぎり、頂上は無理だ」

しかし播隆はその言葉を聞こうともせず一枚岩の割れ目に両手を延ばして、ゆび先を突込んだ。右手の三本のゆびは割れ目にかかったが、左手は二本のゆびがやっとひっかかっただけだった。播隆は、右足を上げて、あるかなしかの岩の出っぱりにかけて、身体をずり上げようとした。二度やって、二度とも滑り落ちた。播隆の口元から南無阿弥陀仏の六文字の名号が洩れた。播隆はその名号と共に三度目のこころみをしたがやはり身体をそれ以上せり上げることはできなかった。播隆の額に汗が光った。彼が身体中に力を入れて、気張ると、汗は急激にぼうちょうして、朝露のように光る玉になった。汗が眼に入り、更に口に伝わっていった。播隆はあきらめなかった。成算を胸に描いてのこころみのようであった。無駄な努力を繰り返しているだけではなく、そうやっているうちに、少しずつ岩になれ、岩のどこかに、奇蹟の足掛りでもつかもうとしているようであった。

又重郎は播隆の身体の動きを見ていた。四度やって四度失敗したけれど、少しずつ身体の安定を保つことがうまくなっていくように見えた。播隆は岩に向って叩きつけるような大きな声で名号を叫ぶと次の試みをやった。播隆は右足を小さな岩の出っ張りにかけると、両手のゆびに全身の重量を託して、濡れた岩壁をずるずると、身体を持ち上げていったが、そこでこらえて、更に

左足を新しい足場まで移動していくことはできなかった。

「ちょっと待っておくんなせい」

又重郎はとうとう我慢できなくなって声を掛けた。播隆が登攀を止めるつもりがないことをはっきりと見て取ったからであった。又重郎は、播隆の背におぶさりかかるようにして、せまい足場に立つと、平衡を崩さないように、徐々に身体を屈(かが)めていって、播隆のわらじ履きの左足を、左肩に受け止めた。

「いいか」

又重郎の押しつぶしたような声が播隆の足元で聞えた。又重郎は少しずつ身体を延ばしていった。途中で、播隆の右足が又重郎の右肩にかかった。又重郎は播隆の全体重を両肩に受けたところで腰を延ばしきった。播隆の身体が又重郎の上で前後にゆれた。

播隆は又重郎の肩の上で手懸りがつかめないで困っているらしかった。一生懸命手を延ばしているが、もう少しのところで、きわまっているように感じられた。

「上人様、私の頭を踏んで下さい」

又重郎は怒鳴った。播隆の身体を両肩に受けている状態だったからはっきりした言葉にはならなかった。播隆がなにかいった。すまないと云ったのか、念仏をとなえているのか分からなかった。播隆の草鞋が又重郎の頭上にかかった。背筋をつらぬくような重さを又重郎は感じた。それで、手懸りがつかめればよし、そうでなければ、その恰好は非常に危険であった。播隆がもし、彼の頭上で平衡を失って転落したら、岩壁に沿ってどこまでも滑り落ちていくことは確かだった。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com